



氷見が生んだ幕末の剣豪
齋藤 弥九郎
～時代を共に生きた志士たちとの交流～

第30回記念 齋藤弥九郎顕彰碑記念剣道大会記念講演

氷見市教育委員会 小谷 超

生い立ち

- 幕末を生きた氷見出身の剣豪

剣を学ぶ・ 教える

- 岡田十松に入門
- 神道無念流の精神

剣を通じて

- 江川英龍
- 桂小五郎(木戸孝允)

剣だけでなく

- ペリー来航
- 明治維新後

郷土の偉人

- 市内に3体の銅像
- 小学校のふるさと学習

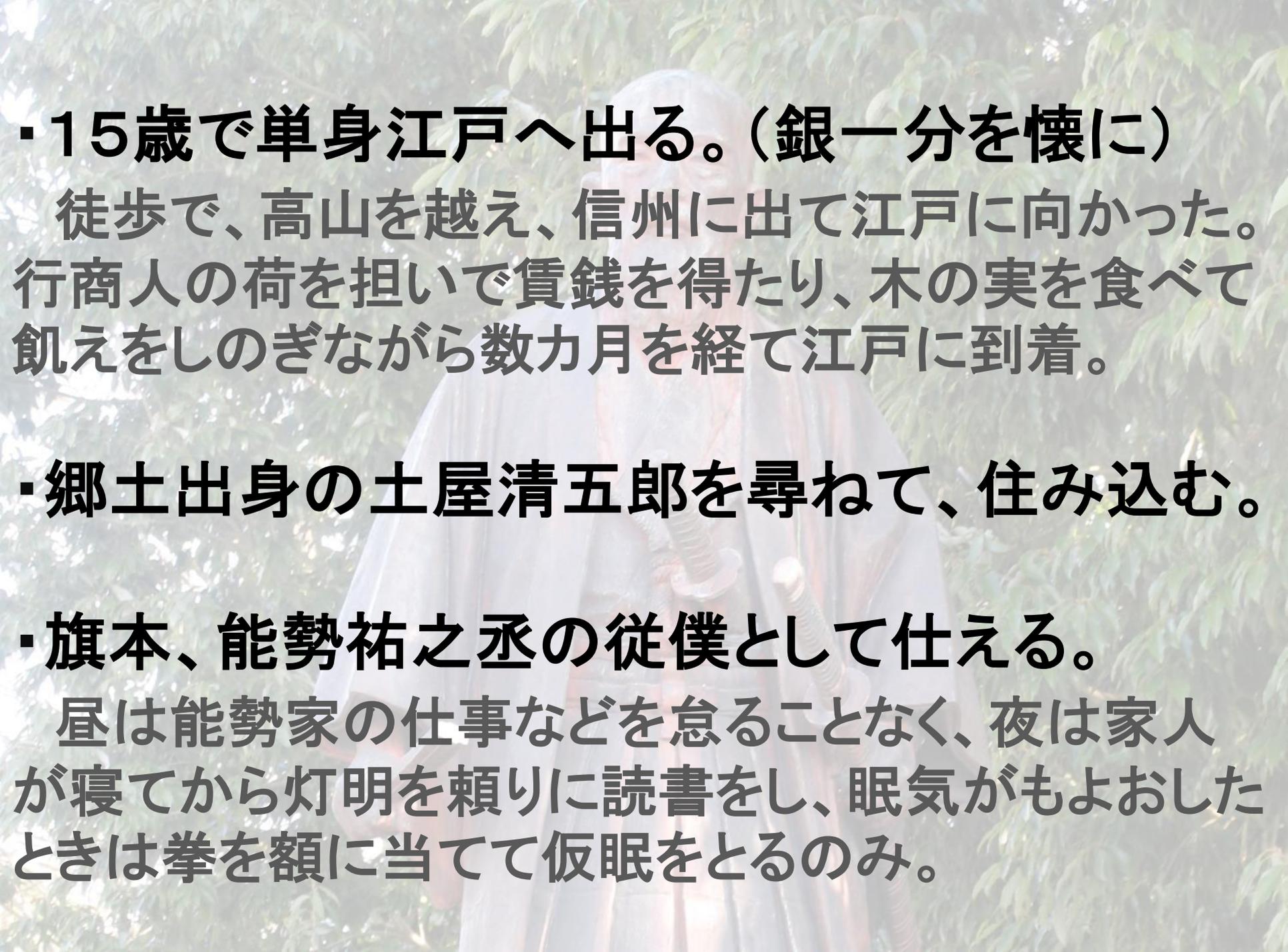
生い立ち

・ 幕末を生きた氷見出身の剣豪

・ 寛政10年(1798)越中国射水郡仏生寺村(現在の富山県氷見市仏生寺)の農家で、組合頭の新助の長男として生まれる。(今から219年前)

・ 13歳で高岡に出て、油屋や薬種店で奉公する。そのとき、加賀藩主の参勤交代の大名行列を見かける。

⇒ 江戸に出て、武士になりたい。

- 
- ・15歳で単身江戸へ出る。(銀一分を懐に)
徒歩で、高山を越え、信州に出て江戸に向かった。行商人の荷を担いで賃銭を得たり、木の実を食べて飢えをしのぎながら数カ月を経て江戸に到着。
 - ・郷土出身の土屋清五郎を尋ねて、住み込む。
 - ・旗本、能勢祐之丞の従僕として仕える。
昼は能勢家の仕事などを怠ることなく、夜は家人が寝てから灯明を頼りに読書をし、眠気がもよおしたときは拳を額に当てて仮眠をとるのみ。

剣を学ぶ・ 教える

- ・ 岡田十松に入門
- ・ 神道無念流の精神

神道無念流 斎藤弥九郎(練兵館)

力の斎藤

北辰一刀流 千葉周作(玄武館)

技の千葉

鏡新明智流 桃井春蔵(士学館)

位の桃井

「幕末江戸三大道場」とよばれる。

・神道無念流・岡田十松道場に入門

18歳の頃、神道無念流剣術の撃剣館、岡田十松に入門し、腕を上達させて、師範代となる。また十松病気で亡くなると、十松の跡を継いだ。

・29歳で独立し、道場「練兵館」を創設

神道無念流の精神

～「神道無念流演剣場壁書」より要約、抜粋～

- ・「武」は「戈」を「止」めるという意味である。
- ・剣を学ぶ人は、心の和平が必要だ。短気で高慢な人は剣を学ばない方がよい。
- ・剣を学ぶ人は、怒りの気持ちを抑えることが最も大切だ。

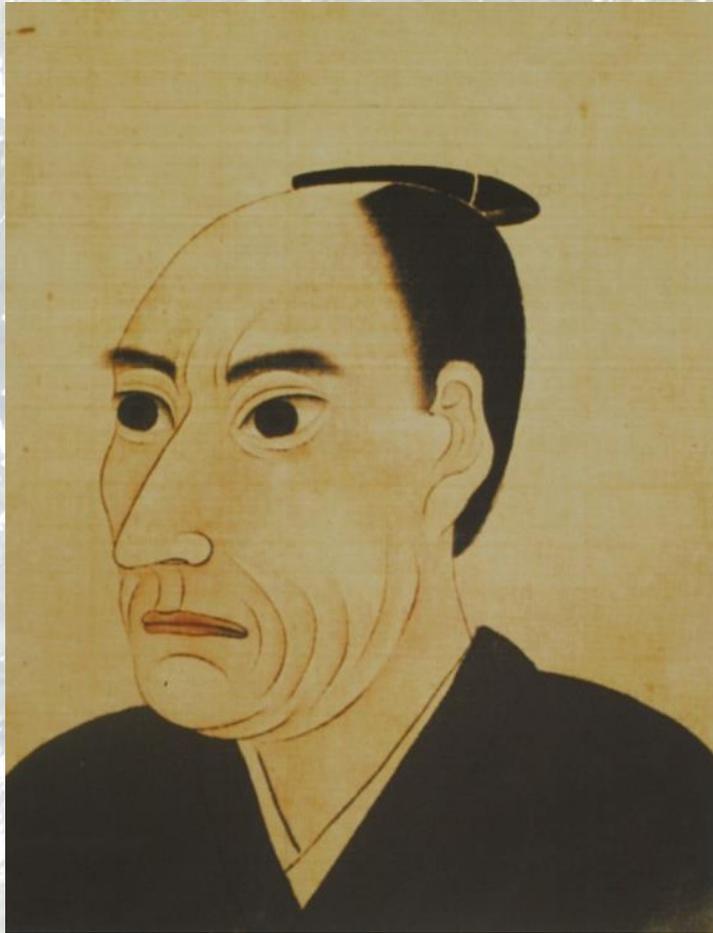
剣を通じて

- ・江川 英龍
- ・桂小五郎(木戸孝允)

斎藤弥九郎と幕末志士等の関係図



江川 英龍（葦山代官）



撃剣館で弥九郎との同門。道場で鍛えられた経験があり、弥九郎が剣の力だけでなく人格も優れていることを知る。

天保6年(1835)江川英龍、代官職を継ぎ、代々続く太郎左衛門を襲名。弥九郎は、依頼を受け、江川の仕事を支える存在になる。(弥九郎38歳)

剣術道場の一道場主だった弥九郎が、これを機に幕末の大きな歴史の流れとともに歩むことになる。

江川と弥九郎の身边に影響を与えた 歴史上の出来事

大塩平八郎 の乱

大坂で大塩が反乱を起こす。江川は弥九郎を大坂へ派遣して、状況を偵察させる。

モリソン号 事件

鎖国下の日本近海に外国船が接近することが増える中、アメリカ商船であるモリソン号を打ち払った。江戸湾（東京湾）警備の強化が叫ばれ、江川は湾内の大砲据えつけ場所（備場）選定の巡視をし、弥九郎も同行。

ペリー来航

黒船が来航して、いよいよ江戸を守るために備えが必要となる。江川は再び江戸湾を巡視し、再び弥九郎を同行させる。（詳しくは後ほど）

桂 小五郎(後の木戸孝允)



弥九郎の命を受けた長男・新太郎が長州・萩に出向き、練兵館への入門者を求める。藩費留学生5人が決定したが、私費でも是非入門させてほしいと懇願し、新太郎らとともに一緒に江戸へ向かったのが桂小五郎である。

1852(嘉永5)年冬に練兵館に入門する。

明治維新に活躍した木戸孝允が江戸に出るきっかけを作ったのは、弥九郎、新太郎親子である。

剣だけでなく

- ペリー来航
- 明治維新後

幕末最大の事件発生

1853(嘉永6)年6月、ペリー率いる4隻(帆船2隻、蒸気船2隻)の軍艦「黒船」が浦賀に来航。大統領の書簡を幕府に渡して開国を迫り、来春までの回答を求めた。



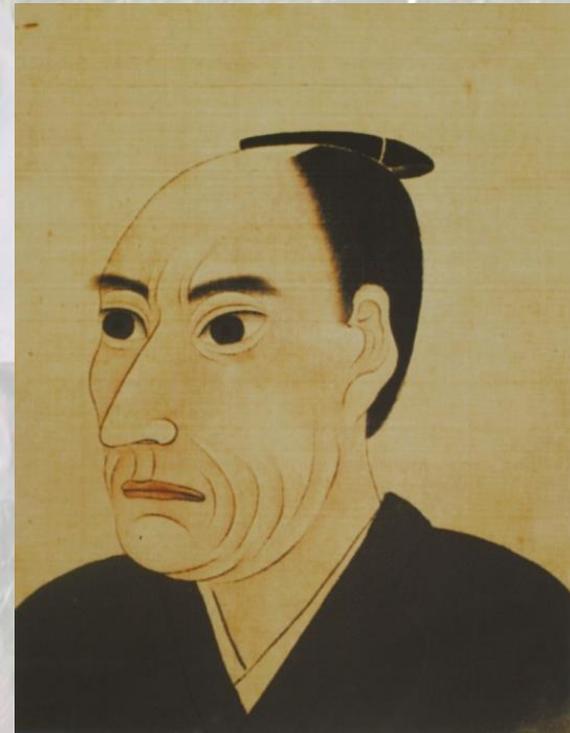
幕府、ペリーが帰ったあと、大急ぎで対策

・具体的な防備計画を立てるための海岸調査

・台場の築造と大砲の鋳造 など

これらの対策のため幕府に抜擢されたのが弥九郎が仕える

江川太郎左衛門英龍である。

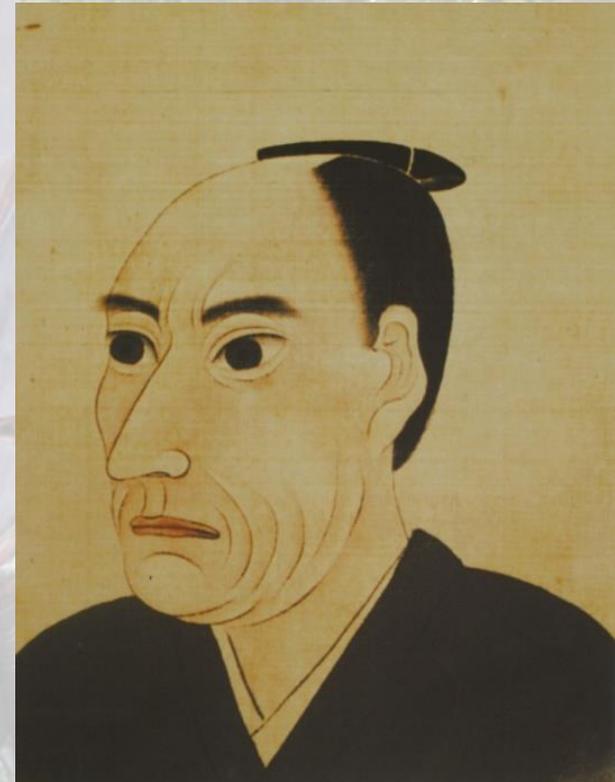


江戸湾調査に出発

- ・6月18日に命を受け、大急ぎで準備。弥九郎にも随行を命じられた。
- ・弥九郎の弟子、桂小五郎も身分を隠して、同行。

江川が弥九郎に命じたこと

- ・江川が設計し、築造場所を定めた台場の現場監督。
- ・大砲铸造(湯島馬場)の御用掛





弥九郎、台場築造の現場監督を任される。

小五郎、弥九郎の弁当もちとして、連日、現場に同行していた、とされる。

大砲鑄造(湯島馬場)の御用掛



品川台場に設置されたもの
(現在靖国神社遊就館前に展示)

1854(嘉永7)1月ペリーの艦隊は7艘となって日本へ再びやってきた。

- ・江川英龍は、ペリー再来に際して、もし江戸近くまで軍艦が侵入してきたとき、舟で乗りつけて、退去交渉をする役目を命じられていた。そのため江川は、弥九郎を伴って濱御殿に詰めており、万が一に備えて準備をしていた。
- ・結局黒船は江戸湾奥まで来なかったが、もし来ていたら、弥九郎はペリーに会っていた可能性が高いと思われる。

1856(安政3)年頃、「弥九郎」の名と道場
「練兵館」の経営を長男新太郎に譲り、隠居し
て、斎藤篤信斎と名乗った。
またこの頃、桂小五郎が練兵館の塾頭となる。



斎藤 新太郎(2代弥九郎)

1868年1月、王政復古の大号令で明治新政府樹立。篤信齋(71歳)、新政府に仕える

- 会計官権判事・・・新政府の鉱山事務の総轄として、金銀銅山の開発を担当。主に生野鉱山(兵庫県)。
- 造幣局権判事・・・大阪に建設中の明治2年11月に火災発生。火の中に飛び込み大火傷しながら、重要書類を搬出。
- 鉱山大佑、鉱山大属などを拝命



維新新政府に仕えていた頃の
篤信齋(初代弥九郎)



篤信齋（初代弥九郎）74歳の生涯を閉じる。
（明治4年10月24日）
墓は、東京・代々木の福泉寺にある。

郷土の偉人

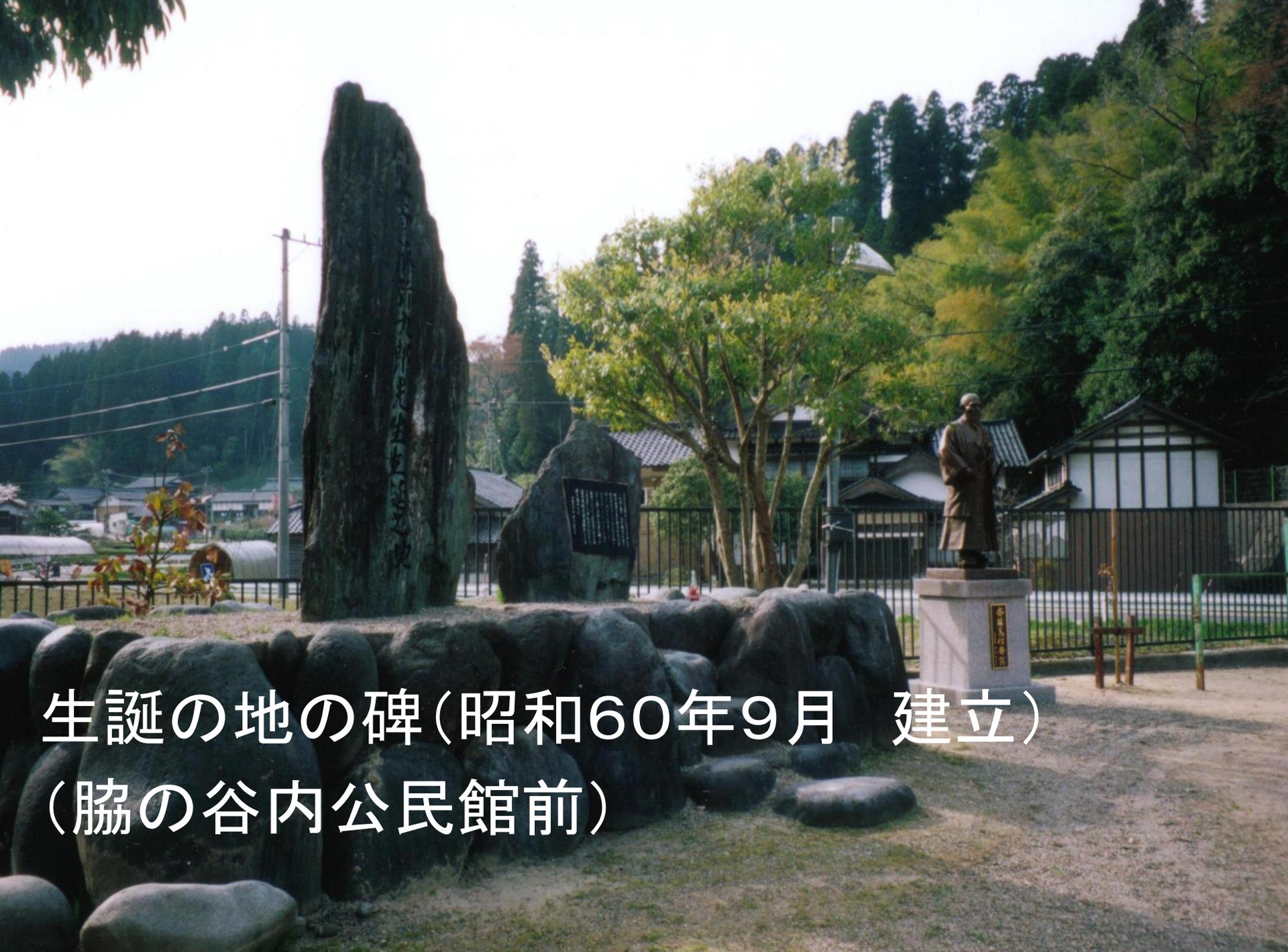
- 氷見市内に銅像3体と顕彰碑2基
- 小学校のふるさと学習



十三中学校の銅像
昭和36年11月建立



朝日山公園の銅像
昭和44年秋 建立



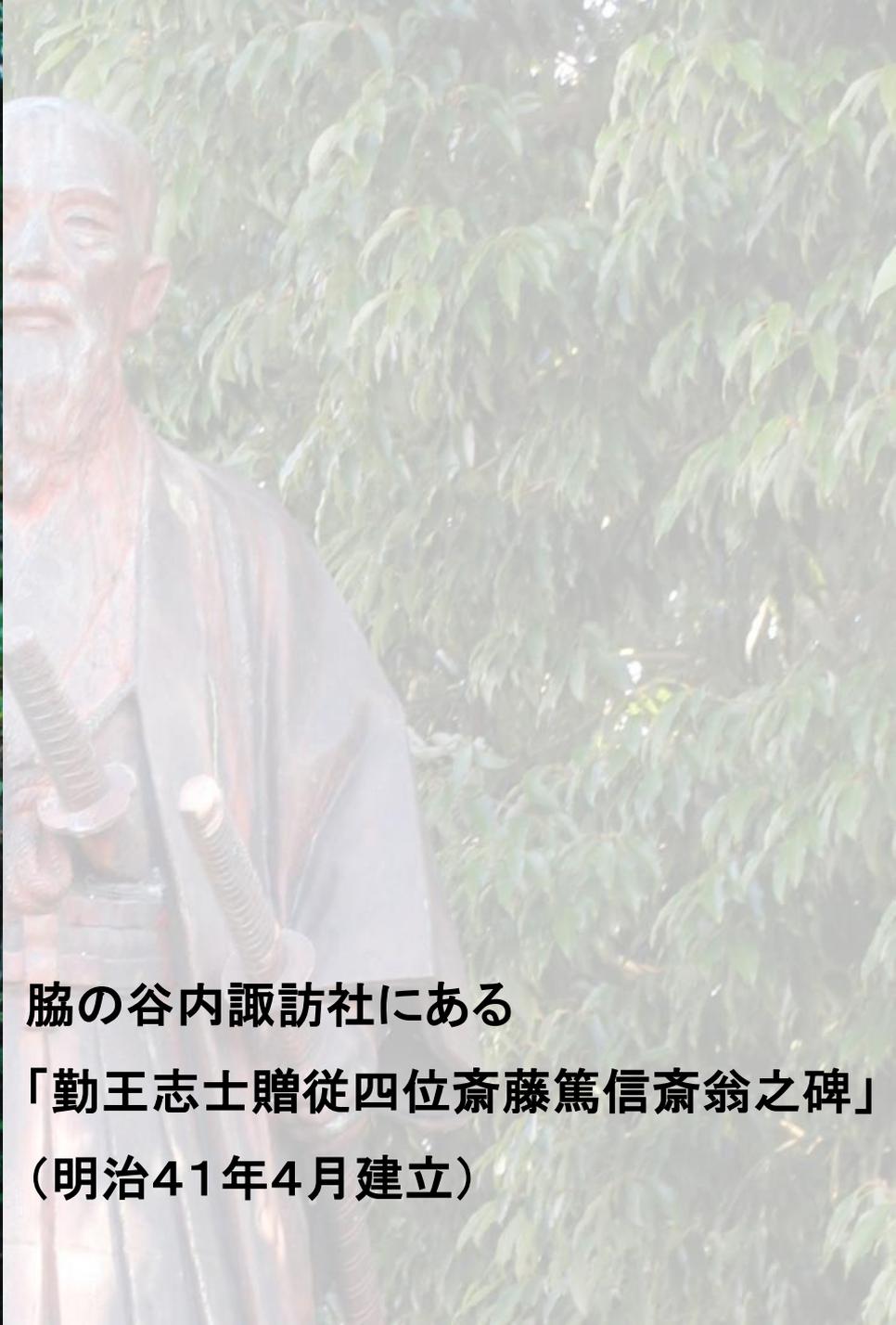
生誕の地の碑（昭和60年9月 建立）
（脇の谷内公民館前）



齊藤篤信翁
昭和二十五年十月八日

平成16年10月24日建立





脇の谷内諏訪社にある

「勤王志士贈従四位齋藤篤信齋翁之碑」

(明治41年4月建立)

小学校のふるさと学習

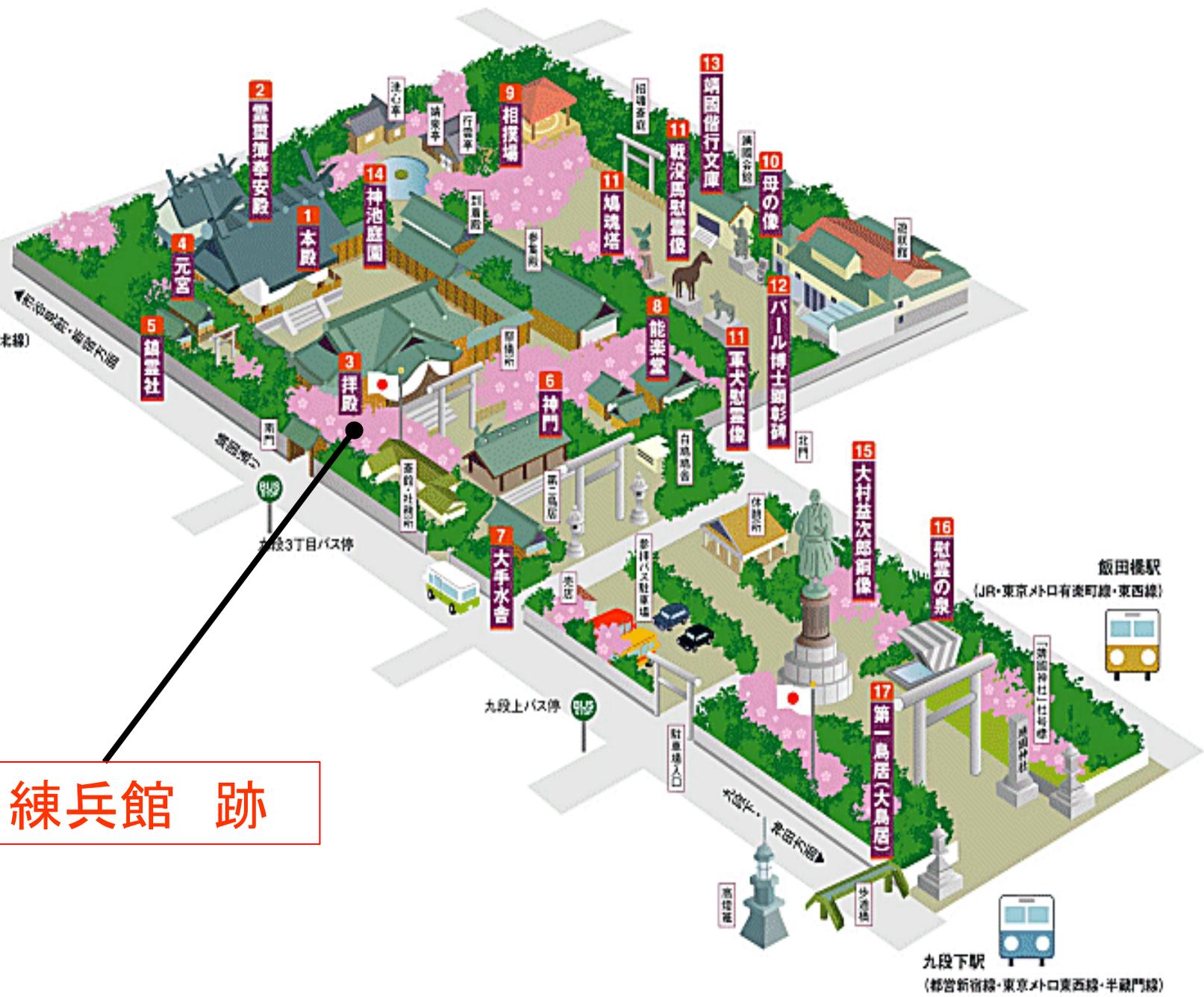


地元・氷見市立湖南小学校6年生は、毎年、銅像や顕彰碑をバスでめぐった後、教室に戻り、歴史の学習と絡めて、郷土の先賢・斎藤弥九郎の生涯を学んでいます。

市ヶ谷駅
(JR・都営新宿線・東京メトロ有楽町線・南北線)



練兵館 跡



飯田橋駅
(JR・東京メトロ有楽町線・東西線)



九段上バス停

九段下駅
(都営新宿線・東京メトロ東西線・半蔵門線)



幕末志士ゆかりの練兵館跡

この練兵館は、神道無念流の剣客 齊藤弥九郎により、それまで俎橋付近にあった練兵館が天保9年(1838年)の火事で類焼したため、この地に再建され、その後約30年間隆盛を誇った。練兵館には、高杉晋作、桂小五郎(木戸孝允)、品川弥二郎など幕末の志士が多数入門し、特に桂小五郎は剣の腕前も優れ、師範代もつとめている。また、伊藤俊輔(伊藤博文)も出入りしていたといわれる。

なお、この練兵館は千葉周作(北辰一刀流)の玄武館、磯井馨蔵(鏡新明智流)の士学館とともに、幕末三道場といわれている。

Site of the former "Renpeikan"

The "Renpeikan" was one of the three most famous "kendo" (Japanese fencing) training schools at the end of the Edo era.

A powerful samurai and kendo master, Yakuro Saito, rebuilt it here after the original school burnt down nearby in 1838.

Many famous samurai active in the Meiji Restoration trained here.

Some of them subsequently held important posts in the Meiji government.

